

# 平成25年度第3回 まちづくり寺子屋

## 「明日のいばらきを創るために」 講義概要

日時：平成25年11月24日（日） 午後1時～

場所：茨木市役所南館 10階大会議室

テーマ：「住民による住民のための防災を考える」

講師：立命館大学政策科学部 准教授 豊田 祐輔 氏

### <豊田先生のプロフィール>

立命館大学大学院を修了後、2013年より現職でご活躍されています。また、同大学の歴史都市防災研究所メンバーも務められています。

防災まちづくりを専門とされ、京都の地域コミュニティと共に防災活動等を行い、災害に強い地域づくりを進めるなど、住民による住民のための防災の研究に取り組んでおられます。



立命館大学政策科学部  
准教授 豊田 祐輔 氏

●初めに災害を疑似体験する「リッツ・コミュニティ・ゲーム」を参加者全員で行いました。

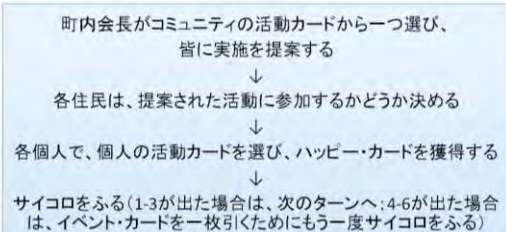
災害が発生した場合、日常の備えや地域での防災訓練を実施しているか否かで被害状況が大きく変わるため、自助や共助によって災害のリスクを軽減する方法を理解するゲームです。



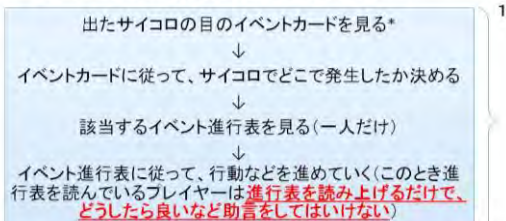
### ルール

- 幸福を得るためには、ハッピー・カードをたくさん集めることです。
- 時間カードとお金カードを使って活動を行うことで、ハッピー・カードや防災経験を獲得することができます
- お金カードは次のターンに持ち越すことができます
- 時間カードは次のターンに持ち越すことができません

### ゲームの流れ

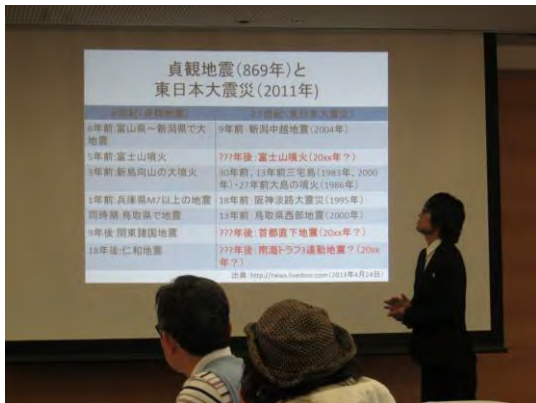


### もしイベントで火事が発生したら・・・



\*イベントは1-5までである。6が出た場合は、「火事が起こらなかった」。

●ゲーム終了後に講義がありました。



日本における自然災害の人的被害は、1950年代までは甚大でしたが、1960～90年代にかけて少なくなりました。災害対策技術が進んだことも一因ですが、この時期は大災害が発生しなかったからです。注意すべき点は、日本は災害大国でありながら、自然災害を経験しないで発展を成し遂げたということです。

ところが近年、阪神淡路大震災をはじめとする大災害が起きています。2年前の東日本大震災

は「想定外」と言われましたが、実は9世紀にも同じ場所で同じ規模の貞観地震が発生しています。9世紀と状況がよく似ていることから、21世紀は大災害が多く発生するのではないかとされています。

地震には、海溝型と内陸型があります。海溝型地震は、海洋プレートが大陸プレートの下に沈み込む際、何かのきっかけで撥ね上がることで発生し、長い横揺れが起こります。

一方、内陸型地震は、海洋プレートに押された大陸プレートが断裂して発生し、短い縦揺れが起こります。東日本大震災が前者、阪神淡路大震災が後者に該当します。日本は4つのプレートが接しており、分かっているだけでも約2,000の活断層があります。



茨木市で想定される地震は、南海トラフ地震の周期が平均114年で、今後30年以内の発生確率は50～70%、一番近い活断層の上町断層帯の周期が約8000年で、30年以内の発生確率は2～3%といわれていますが、地震はいつ発生するかわかりません。



ここで、本日のテーマである「住民による住民のための防災」を考えます。これまでの震災の教訓から、自助・共助・公助と、行政・専門家への依存がについて考えます。

阪神淡路大震災で被災して救助された人の内訳は、自力で脱出した人が34.9%、救助隊に助けられた人が1.7%、家族に助けられた人が31.9%、友人・隣人に助けられた人が28.1%、通行人に助けられた人が2.6%となっています。また、救出までに要した日数別の生存率は、2日目から低くなり、4日目以降はほぼ0%になります。

そのため、地震発生から遅くとも3日目までに救出される必要がありますが、救助隊は到着まで時間がかかり、消防隊も通常通り活動できるとは限らないため、頼りになるのは家族や地域住民です。

自分で自分の命を守る「自助」、地域コミュニティで協力する「共助」、行政や救助隊による「公助」の3つが合わさらなければ、大災害で生き残ることはできません。



東日本大震災では、想定地域よりも広い地域が津波で浸水し、亡くなった人の多くは想定地域外で被災しました。

また、避難した人のうち、大津波警報を見聞きして避難した人が35%、津波警報を見聞きして避難した人が30%でした。これだけの人が警報の発令がない限り避難しないということです。このような行政・専門家に依存した受け身の姿勢が、多くの方が亡くなる大きな原因です。行政の情報は重要ですが、自ら行動してほしいと思います。



これらの教訓を活かすには、「防災情報の作成」と「防災活動を防災だけで考えないこと」がポイントとなります。

一つめの「防災情報の作成」の手法としては、災害図上演習と避難シミュレーション訓練があります。

災害図上演習は防災マップを用いて消火器の位置等の情報を集め、災害時の状況を検討する演習です。防災マップに震災時考慮しなければならない情報を書き込み、陥る可能性のある状況と対応を住民同士で話し合うことで、何をすべきか発見できます。

避難シミュレーション訓練は、参加者に被災者役、救助役等の役割をランダムに割り当てた上で、道が家屋の倒壊で通れない等、地域の状況を設定して避難訓練を行います。専門家が設定した状況下で、住民が知識を総動員し、仮想の災害を体験することにより、教訓や反省点を見つけることができます。普段から防災情報をもとに自分たちで考えることで、情報待ちにならない状況を作り出します。

### 防災活動を防災だけで考えない

- 災害後の活動は日常の活動の延長

高齢者の世話(防災福祉コミュニティ)

→地域での助け合い(今は行政や民間企業が担う)

避難所の設営

→地域の運動会や祭りにおけるテントの設営など

避難所でのルールなどの決定

→町内会での活動や役割分担の決定

二つめの「防災活動を防災だけで考えないこと」とは、防災活動を日常の活動の延長として捉えることです。例えば普段、独居高齢者のサポートは行政や民間のデイケアセンター等に任されていますが、災害時は頼ることができません。地域内での支え合いが非常に重要になります。地域の運動会や祭りにおける住民同士の協力は、状況は違って行う活動は同じです。地域の行事に参加することが災害時にも役立ちます。特に、自主防災会がないところや活動が停滞している地域では、日常生活において防災を考えることが重要です。

●講演後に質疑応答が行われました。

**質問：**災害時、同じ地域内でも自力で脱出できる人と助けられる人の違いは、自助の取り組みの差によるものでしょうか。

**答え：**まずは、自宅の耐震補強や家具の転倒防止機材の設置等の自助が重要です。また、地域内で誰がどこにいるかを知る意味で、住民名簿も重要です。阪神淡路大震災の時、淡路島の北淡町では住民同士の関係が親密で、誰が家のどの部屋で寝ているかまで互いに知っていたので、生き埋めとなった人を全員救助できました。

**質問：**地域の防災組織の有無は、どこで教えてもらえるのでしょうか。

**市：**茨木市における自主防災組織は、平成24年3月現在で28組織結成されており、今後もさらに広げるべく、危機管理課を中心に、市として取り組んでいます。

**質問：**ゲームではスラムの状況が理解できませんでしたが、時間的な制約があったためでしょうか。

**答え：**ルールが複雑ですが、慣れると意図が分かるようになると思います。スラムの状況を体験するゲームが屋内で行う防災訓練として利用できることを理解し、皆さんの地域に持ち帰っていただきたいと考えました。



編集：茨木市都市整備部都市政策課

〒567-8505 大阪府茨木市駅前三丁目8番13号

TEL：072-620-1660（直通） / E-mail：toshi@city.ibaraki.lg.jp